

教育

弥生やよいの思い

「智に働けば角が立つ。情に棹させば流される・・・」といったのは夏目漱石だが、確かに、知識だけでは人は生きられない。仮に、相手を論破したとしても、持論が正論であればあるほど相手に深い恨みをのこすことになり「江戸の敵は長崎で」となりかねない。学識を備えた集団でも「心」とは案外狭隘きょうあいから抜け出せないものなのだ。一方、人とは情に流されるから人なのであり、そのことが、血の通った人として生きている証ではないかと思っている。

私は教壇に立っていた頃、三年に一度訪れる三月一日の卒業式がもつとも嫌であった。教科指導に悔が残ったからかも知れないし、人としてのあり方についても、十分伝えたかと問われれば自信はない。しかし、その根源はきわめて主情的で情緒の揺れから来るものであったのだ。他の人は愚かと思うかも知れないが、三年間哀樂を共にしてきたこの目の前の生徒諸君に、再び会えなくなるのではないかという漠然とした不安と、先取りとも言える寂寥感におそわれるからなのであった。別れの時、私には伝えたいことがたくさんあったし、言い残したいこともいっぱいあった。しかし、それが上手

く伝えられず、いや正しくは言葉にならなかったのである。だから、せめてもの惜別の言葉として手書きの心の裡を手渡すことにした。

以下はその一部である。

人は四季のうちで、自分の生まれた季節が一番印象深いと云います。特に生まれ月となると、自己存在の意味も含めて格別の思いになるのかも知れません。私は弥生の生まれです。そして、弥生は最も好きな季節でもあります。弥生は長く厳しい冬を濾過した^{ろか}陽光の衣をまとして颯爽と登場します。誰もが待っている春の喜びを運ぶ使者でもあります。しかし、この生きとし生けるものに生氣と活力を与え、南風と桜花に象徴される華やかな弥生も、これを迎える人の心情によっては晩秋の時雨にも勝る憂愁と感傷の季節となることもあるのです。

教員には三年に一度この耐え難い寂寞とした弥生を嘆かなければならない宿命があります。同時代に、同じ屋根の下で過ごすことが出来た僥倖を天に感謝しながらも、三年間の想いは連綿として果てしなく、自分が教員という職業を選んだ意味と、適性を深く省みなければならぬからです。

諸君とこのF高で出会ったのは、小生が「不惑」^{ふわく}を迎えたその歳

でした。不惑は「論語・為政第二」から出た言葉で良く使われ、四十歳を意味しますが、四十歳は別称として「初老」という意味も含んでいて人生の秋章を思い描かなければならない年齢でもあります。人生を八十年と云うならば、山の頂上にあって越し方行く末を反省を込め人として確かな進路を見極めなければ年齢なのです。したがって、私にとってこの「不惑」や「初老」と云う語句には、人生の深淵しんえんを覗かせるに足る懼れおそと後悔の意味を十分に備えている言葉であります。

確かに人は誰でも、この世に生を受けるとすぐさま時間という流れに乗って天の命ずるまま、さまざまな形で生涯を送るという事實は多く論を待ちません。だが、私にはどうしてもこのことを単に物理的に日時を経過することで、必然的に「不惑」や「知命」と云う言葉にとって代わっていくものとは到底思えないのです。人生がたった一度きりのものであればこそ誰もがどんな場合でも、瞬間、瞬間を良知を規矩きくとして懸命に生き抜かなければならない。そこで、考え、悩み、怒り、哀しみ、怒り、喜びのカオスの蓄積がその人格や年輪となり、決定的な価値観として定着するのではないかと思うのです。これは、ある意味で百万言を以ってしても説明不可能な真

価値を有するものであり、人それぞれが拠って立つ原点になっていくものであると言いつ切り切ることが出来るでしょう。しかも、混沌こんとんの濃度が濃ければ濃い人ほど、そこにやがて生まれる水は、清澄で尊く価値のあるものであると考えられます。本当は、人が一年毎に一つひとつ歳を重ねていくということは、実は大変難しいことなのかも知れないと思わざるを得ません。人間という生物は、過ぎてみると案外に何もせず、何も残していないことに気付かされるからです。小生の正直な述懐です。それが人間の普遍的特性とするならば、これからの一年を、いや、一日を意味のある価値を持つ日々にしていかなければならないと改めて思い直しているところです。

小生は人として教員として年齢に匹敵する中味を備えていたか自問し続けています。

- ・人を信じ公平に接してきたか
- ・人格を尊び誠実を尽くし得たか
- ・人として範たるに値していたか

等など、でもその答えは、何時も決まって「否」を脱皮できずにウロウロしてきました。それでも、白墨の粉まみれになって教員生活の終る「還暦」を迎える頃には、今よりもう少し成長した教員にな

つていたいと願っています。

「卒業とは、あることが終ったことではなく、新たなことが始まる出発のときである」という定義は、蓋し万人を納得させる名言ではありません。しかし、教員にとってこの日は、再びこの手に戻って来ない恋人の後ろ姿を見送る少年の心の震えであり、希望に満ち溢れた車中の人の心情からは想像し難い、立ち去って行く汽車を見送り、ホームに立ち尽くしている見送り人の心と変わりはないのです。

諸君のご多幸を祈っています。

医学部へ進学した卒業生には、山本周五郎の「赤ひげ」のはなしをし、事情が許すならば卒業後は無医村に入することを勧めた。家業を継いでやがて社長になる人には、利益もさることながら地域社会に尽くすことを奨励した。多くの人は教職の道を選んだが、私の失敗談を残らず隠さずに話した。企業を選んだ人には愚直に道を究めよ。と折りあるごとに言い続けた。彼らはいまや五十歳を目前にしている。人生の頂上に立っている。風の便りや年賀状でそれぞれ見事な生き方をしていると知り、弥生の思いは杞憂だったようである。